

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	棚橋 由賀里
論文題目	15-16世紀モロッコのスーフィーによる社会改革 —タリーカ・ジャズーリーヤを中心に—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、15-16世紀モロッコにおいて活動したタリーカ・ジャズーリーヤの社会改革について、個々のスーフィーの著作に焦点を当て、その背景・思想・活動を明らかにすることを旨とするものである。本論文は、6章から成る本文と序論・結論によって構成されている。</p> <p>序論は、先行研究において、通常「ジャズーリー教団」と訳されているタリーカ・ジャズーリーヤが、17世紀に書かれた聖者伝の記述をもとに一枚岩の教団組織とみなされ、その系譜に連なる個々のスーフィーの著作が等閑視されてきたことを指摘する。そのうえで、「タリーカ・ジャズーリーヤ」の語を実態概念ではなく分析概念として用い、スーフィーたち自身の著作を分析することの重要性を示す。</p> <p>第1章は、マリーン朝からサアド朝による統一までの流れを、政治・社会史を中心に追って、時代背景の全体像を提示している。</p> <p>第2章は、ジャズーリーヤの名祖ジャズーリーに関して、その死後2世紀以上を経て書かれた聖者伝の記述をもとに後代の聖者伝の記述に基づいて、「異端的」で「過激なジハード主義者」と描写されていた人物像の修正を試みる。彼が著した神学書の記述を同時代の神学者の著作と比較することで、実際には当時の北アフリカの多数派に属する穏健な思想と、民衆教育への熱意を持っていたことを明らかにする。</p> <p>第3章は、タリーカ・ジャズーリーヤの再定義をおこなう。まず、タリーカ・ジャズーリーヤの語を分析概念として用いることを再確認したうえで、比較的同時代に近い16世紀に書かれた聖者伝資料の記述から、誰がタリーカ・ジャズーリーヤのスーフィーと同定できるかを示すとともに、彼らの活動形態が多様であることを示す。</p> <p>第4章は、タリーカ・ジャズーリーヤのスーフィーのうち、著作と言行がよく残っているジャズーリー (1465年没)、ガズワーニー (1529年没)、ハブティー (1555年没)、ヤルスーティー (1561年没) の著作を分析するとともに、その活動内容と照らし合わせて状況的・思想的背景を探る。スーフィー思想に関しては聖者論・修行論を分析し、それぞれの理想的なスーフィーのあり方を分析する。また当時の社会に対する言及と、彼らの活動内容の分析から、問題意識のありかを明らかにする。知識のないスーフィーが民衆を誑かすのを批判して正しいスーフィーの育成を試みる例、モロッコ社会の混乱の原因をエリート層の怠慢と悪徳に帰して批判する例、民衆に基本的なイスラームの教育を施し風紀の改善を図る例、戦乱や飢饉で荒廃した農地を再生させる例など、彼らの関心と取り組みの多様性を示す。</p> <p>第5章は、第4章で分析した個々のスーフィーの活動を内容ごとに比較する。スー</p>			

フィーおよび民衆への教育活動、政治との距離感、食料の供給を中心とした社会活動といったトピックに基づいて検討を行う。それにより、スーフィーの問題意識および活動内容、スタンスといったものはさまざまであり、これまでタリーカ・ジャズーリーヤ全体を上げて取り組まれていたと考えられてきた社会改革運動は、実際にはせいぜい数人のスーフィーだけが取り組んでいたものであったことを示す。

第6章は、タリーカ・ジャズーリーヤのスーフィーたちの活動に対する同時代人の応答を分析する。知識人に関しては、協力的な者、批判的な者、はっきりと対立する者などの類型を示す。権力者については、タリーカ・ジャズーリーヤと協力関係にあったサアド朝について、その内部も一枚岩ではないこと、また同一のスルターンに関しても、スーフィーの権威を統治に利用しつつ、自らの人気を脅かされそうになると迫害をおこなうなど、態度が一貫しないことを示す。最後に、先行研究では内部対立に伴う分裂とサアド朝スルターンの迫害によって「分解」したと言われてきたタリーカ・ジャズーリーヤの系譜を検討し、タリーカ・ジャズーリーヤそのものが内部分裂できるほど組織化されていなかったこと、サアド朝スルターンの迫害はジャズーリーヤ全体を標的としたものではなかったことを明らかにする。また、17世紀以降の歴史を描いた史料でタリーカ・ジャズーリーヤに関する記述は姿を消す一方で、ジャズーリーの系譜に連なる個々のスーフィーはモロッコ史において存在感を発揮し続けていることを示す。

結論は、本文での議論を整理したうえで、組織体としての教団・王朝といった先入観から距離を取り、個々のスーフィーの著作を丹念に分析することの意義を主張する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、15-16世紀モロッコにおけるタリーカ・ジャズーリーヤの社会改革を題材に、通常「教団」と訳されるタリーカ概念を問い直すものである。

本論文の学術的な意義は、下記の四点に要約される。

第一に、同時代の歴史文献が欠落している当該時期のモロッコ史を、思想書を用いることで再現したことが挙げられる。通常、前近代のタリーカ研究は、年代記や列伝などの史料を用いて史実を明らかにすることによってなされるが、15-16世紀モロッコについては、その史料自体が同時代には存在しないゆえに、後代のものを用いざるを得なかった。本論文は、後代に書かれ潤色の混じっている可能性の高い歴史文献に代えて、従来歴史研究にはあまり用いられてこなかった思想家自身の手になる思想書から、当時の時代状況を描き出すことを試みている。これは、思想研究と歴史研究の架橋を目指す学際的な試みと評価できる。

第二は、著名なスーフィーであるジャズーリー像の脱構築と再構築を試みたことである。ジャズーリー（1465年没）は『選ばれた預言者のための礼拝のズィクルにおける恵みの印と光の輝き』（*Dalā'il al-khayrāt wa shawāriq al-anwār fī dhikr aṣ-ṣalāt 'alā an-nabī al-mukhtār*）という有名な祈祷書の著者としてイスラーム世界全土で広く知られるが、同時に後代の聖者伝の記述に基づいて、「異端的（ここではシーア派的）」と描写されてきた。これに対して本論文はジャズーリー自身の著書を分析することにより、シャーフィイー学派という、スンナ派のなかでも当時の北アフリカで主流・多数派の思想集団に属していたことを示した。同様に、従来の「過激なジハード主義者」という評価に対しても、民衆教育に熱意を注いだ穏健な教育者というアンチテーゼを示し、実証している。

第三に、「タリーカ」概念を根本的に問い直したことが挙げられる。上述したように、通常タリーカは教団と訳される。しかし本論文は、タリーカ・ジャズーリーヤの系譜に属する思想家たちの文献を丹念に追うことによって、このタリーカが一枚岩の組織体ではないことを示した。それに代えて本論文は、個々人の活動を丹念に追うことの必要性を説く。これに付随して、サアド朝という王朝（組織体）についても、本論文は根本的な見直しが必要であることを提唱する。

上に述べてきたように、本論文は通説に対して大きな見直しを迫る大胆な仮説を実証するものであるが、それを支えているのは、写本の精確で丁寧な読解である。この文献学的貢献を第四の学術的意義に数えることができる。本論文の扱う一次資料の多くは、いまだ刊本になっておらず、現地図書館で執筆者自らが収集してきた写本群である。しかも、モロッコを含む北アフリカで用いられているアラビア語書体（マグリビー書体）は、通常日本のアラビア語の講義で教えられるものと異なる独自のもので、読解には特別な熟練を必要とする。本論文は、地道に精励し、文献学に邁進してきた研究姿勢の表れと評価することができる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。ま

た、2024年1月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。